

2021年 理事長所信

公益社団法人飯能青年会議所 第48代理事長 守田 隼人

実践躬行

～すべてのひとを笑顔にするために～

【はじめに】

我々は一体何者なのか。我々は今、何をするべきなのか。

2020年、新型コロナウイルスのパンデミックは、人類のあらゆる尊厳を脅かし、世界規模で社会的、経済的危機を引き起こしながら、今尚、私たちの生活に甚大な影響を与えていました。この飯能、日高の地域でも当たり前の日常が失われ、不安と恐怖のなかで市民は暮らしています。青年会議所もまた、活動に大きな影響を受け、日々、生命の安全と経済の再生という難しい選択を突きつけられ、これまでの価値観は見直され、新たな価値基準を模索しなければならなくなりました。

しかし、新しい時代を迎えるを得ない時だからこそ、「明るい豊かな住みよい社会」の実現を築くことを永遠の目標に、志を同じくする仲間と行動に移した創始の精神を今一度呼び覚まし、市民の先頭に立って強力に運動を展開していかなければなりません。

我々は、未来を切り拓く J A Y C E E であると同時に、このまちの市民であり、企業経営者であり、子を持つ親であり、今の時代を支え必死に生き抜く、ひとりの人間であります。しかし、我々は決してひとりで生きていくことはできません。一人ひとりが自立しながら、支えあって生きています。そのうえで重要なことは、今という時間を差し当たりのものと捉えるのではなく、まだ見ぬ我々の子孫たちが「明るい豊かな住みよい社会」で暮らせるように、この飯能、日高のまちをより良く進化させ、次代へと継承させるべく果敢な挑戦を続けていくことなのです。

様々な問題を時代や誰かのせいにするのではなく、自分に何ができるのかを考え行動していきましょう。志を持つことができれば、未来に向けての無限の行動力を生み出すことができます。これから多くの未曾有の危機が訪れ、目の前が不安と恐怖に覆われることがあったとしても、我々が希望の光を差し込ませる切り口をあければ良いのです。このまちの市民であり、企業経営者であり、ひとの親である、我々が自ら踏み出し行動することで、市民、企業、行政と手を取り合い一蓮托生のまちづくりを実現していきましょう。

【地域経済の充実】

新型コロナウイルスの影響を受けていない企業はありません。しかし、その前に景気が悪いことを言い訳にしていないでしょうか。成長経済の終焉を逃げ道にしていないでしょうか。新しい時代を迎えるを得なくなった今だからこそ、企業の存在意義、企業活動の価値観を見直すことは地域経済の充実を図るうえで急務であると考えます。また、まちづくりを

進めていくうえで必要不可欠なのは活力溢れる企業の存在です。まちと企業は一心同体でなければならぬと考えます。我々 J A Y C E E は、青年会議所の一員である前に、地域の青年経済人であり、中小零細企業の経営者であります。自分の家族、従業員を含む地域のひとたちが誇れる企業を創りあげることこそが、まちづくりにも繋がると考えます。2018年、公益社団法人日本青年会議所では定款にビジネスの機会が明記されました。しかし、現在に至るまで青年会議所運動でのビジネスに直結する行動は何か憚れているように思えます。今こそ青年会議所運動を通して地域経済の充実に向け取組を実践すべき時なのではないでしょうか。社会や地域に貢献できる仕事は新しいビジネスチャンスにも繋がります。ひとに必要とされる企業になることで、企業は豊かになり、豊かな企業が増えれば、景気はもとより、ひと、もの、全てが動き、この地域の本当の豊かさを教えてくれるのだと確信します。

【豊かさを学ぶ地域教育】

我々は、子を持つ親世代であり、また子供たちを正しい方向へ導く責任を持つ世代でもあります。子供にとっての初めての教育の機会は親により与えられる家庭教育です。これは我が子の幸せを願い無償の愛を注ぐものです。しかし、我が子さえ幸せになれば良いのか。また、それすらも望まぬ親が増えているように感じます。子供たちの問題は大人の責任です。他人任せにするのではなく、一人の大人として思いやりをもって豊かさを培う教育を地域に広げていきましょう。

『少にして学べば壯にして為すこと有り。壯にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず。』

これは幕末の儒学者佐藤一斎の人生を通して学び続けることの必要性を説いた言葉であります。学ぶということは「豊かな人生を送るための基礎」であり、新たな知識を得ることは「喜び」であり、知識がない限り「知恵」は生まれません。おそらくは、一人のひととしての「思想」も見出せないことでしょう。「思想」が持てない者には新たな一步を踏み出すという「行動」に移すことができないということを私は青年会議所で学びました。この地域の宝とも言える子供たちに、我々だからこそできる、未来を切り拓くための「喜び」を与える教育を実践し、家庭、学校、地域といった教育のトライアングルのなかに、青年経済人として連携を図っていきます。

【情報発信】

情報化社会の到来で、誰もが気軽に各種の情報にアクセスできる状況ですが、我々青年会議所運動が市民に認知されているかといえば、決してそうではありません。我々の運動をより多くの方に知っていただき理解を得られなければ、「明るい豊かな住みよい社会」は達成されません。そこで、公益社団法人飯能青年会議所の最大の武器である広報誌「はんなーら」

では我々の運動展開と誌面内容をリンクさせ、我々の運動をより多くの方に発信していきます。また、急速に普及したリモートシステムを利用することで効率的な取材が可能となりました。この手法を取り入れることで、地域とより多くの繋がりを持ち、まだ知らぬ地域の魅力や問題点を共有し、我々が思い描く未来のビジョンに賛同していただき「はんなーら」を通して地域と共生します。どんなに素晴らしい運動を展開しようとも、地域に伝播され共感を生んでいかなければ単なる私たちの自己満足です。より一層、効果的に情報発信をしていく必要があります。

【防災と地域連携】

1564、この数字は何を表しているか。これは2019年の一年間に発生した地震の回数であります。2011年3月11日に発災した東日本大震災。我が国は過去、何度も大震災を経験してきました。そして今、近い未来必ず訪れると言われている南海トラフ大地震が目の前に潜んでいると考えると幾ら地盤が強いと言われているこの地域も他人事と言っていられない時期が到来しています。それに加え、毎年発生する豪雨災害をも鑑みると、この国は災害大国なのです。目を覆いたくなるような被災地の悲惨な状況を目のあたりにして、我々青年会議所が只々傍観しているだけでは、「明るい豊かな住みよい社会」の実現を愚弄しているのと同じです。地域防災として各自治体で様々な取り組みを行っていますが、地域市民の災害に対する意識は高いとは言えないでしょう。であるならば、行政、自治体、企業、各団体へのネットワークを有する我々が中心となり、この地域を脅かす危機に備えることが必要であり、万一災害が発生した場合にも迅速に対応ができる仕組みを構築し実践すべきだと考えます。

【一蓮托生】

私が青年会議所と初めて触れ合い入会を検討したとき、この組織は自分にとって有益なものなのか。参加することで自分にどれだけの成長があるのかと、当時は全てに於いての主語が自分でした。そんな私に、どこかの誰かのために汗をかくことの素晴らしさを教えていただいたのは青年会議所の先輩方や、次々と現れる仲間たちでした。このまちの発展を願い、豊かな社会の実現ために本気で議論を交わす仲間たちに、いつの間にか本気で向き合い、気づいたときにはその議論に加わっている自分がいました。現在の飯能青年会議所の会員数は33名です。また会員の半数が入会3年に満たない会員で構成されています。そうしたなかでも新入会員の新しい考え方や発想は、組織の大きな活力となっています。新たな原動力と連綿と受け継がれてきた飯能青年会議所の伝統を融合し、青年会議所の理念に沿った運動を展開することができればひとは動き、ひとは集います。在籍年数関係なく会員同士が本気で語らい意見を交わし、決定した事業には一蓮托生、全力で取り組むことが仲間に対してても、このまちに対しても礼儀であり愛情なのではないでしょうか。このまちを想い、互いを高め合い未来に向けて果敢な挑戦を続けていきましょう。

【結びに】

私は都会への憧れ、大人への反発心で一度はこの地域を離れた人間です。しかし、今、このまちで働き、住み、暮らし日々感じていることがあります。この地域が心から好きだということです。そう感じたときに初めて親や家族、支えてくれる人たちへの感謝の気持ちが溢れ出しました。それを気づかせてくれたのは紛れもなくこの青年会議所という団体です。だからこそ、心に強く思うことがあります。この団体の運動にどこか価値観や興味を見出せないひと。まわりの目や意見が気になり J A Y C E E としての志を貫けないひと。それは自らの行動や思想、経験が全てなのではないでしょうか。周りが理解してくれないのであれば、輝かしい未来を夢見て実行力を持った運動展開によって理解を求めればいい。評価が悪いのであれば己を律し評価を勝ち取ればいい。自分が嫌な思いをしたのであれば自分の時代で止めなければならない。全ての原因は自分にあり、自らが一步を踏み出さなければ、今と何も変わらないでしょう。考えこむより先ずは行動しよう。歩幅が小さくとも、時間が掛かったとしても踏み出す勇気を持とう。我々に残されている時間は限られています。このまちの「明るい豊かな住みよい社会」の実現を夢見て。今こそ青年会議所の本気を魅せよう。まだ見ぬ未来のために。すべてのひとを笑顔にするために。